

薬の適正使用における禁忌病名データベースの構築

栗原 輝子¹、奥 覚子¹、鈴木 聡子¹、工藤 賢三²、佐藤 信範³

¹データインデックス株式会社、²岩手医科大学附属病院 薬剤部、

³千葉大学大学院 薬学研究院 臨床教育

【目的】患者の症状、原疾患、合併症、既往歴（以下、「併発疾患」という）を考慮した薬の適正使用は、臨床において常に求められるところである。しかし、併発疾患に対して禁忌など投与制限のある薬を膨大な医薬品情報の中から把握した上で適確に患者の情報を聞き取ることは、医療従事者の知識や経験だけでは補いきれない。そこで、医療従事者が患者の併発疾患情報を聞き取ることは勿論のこと、患者自身も自分の併発疾患を医療従事者へ伝え易くする必要があると考え、併発疾患に対して該当する禁忌や原則禁忌といった投与制限のある薬を容易に監査し、患者自身も活用することが可能なデータベースの構築を試みた。

【方法】薬の投与に際して、添付文書の禁忌欄等に記載の投与制限のある代表的な24疾患（以下、「禁忌病名」という）を選定した。選定した禁忌病名は、患者自身が自分の原疾患や既往歴の理解と、それらを医療従事者に伝える際の表現を考慮して作成した。更に、添付文書の禁忌、原則禁忌、慎重投与、重要な基本的注意の欄に様々な表現で記載されている併発疾患を添付文書から全て抽出し、禁忌病名と紐付けた。併発疾患の抽出の際は、添付文書の記載内容から禁止・原則禁止・相対禁止・希望禁止・慎重投与・注意の6段階に分類し、制限レベルとして付与した。

【結果・考察】今回構築したデータベースは、添付文書に記載されている情報を基に「禁忌病名 併発疾患 制限レベル 処方薬」がリンクされているため、患者の禁忌病名に対して投与の制限がある薬の監査を、迅速かつ網羅的に行うことが可能である。更に、本データベースにおける禁忌病名は、患者にもわかりやすい表現で作成したため、患者対応時に本データベースをタブレット端末などに搭載し患者自身が自分の禁忌病名を直接登録することで、患者情報や人員の限られた在宅医療の環境においても薬の適正使用の今後の発展に寄与できるものと考えられる。